

FD NEWS



No.32 2011年11月30日
摂南大学 FD 委員会
〒572-8508 寝屋川市池田中町 17-8
TEL: 072-839-9106
E-mail: kyomu@ofc.setsunan.ac.jp

摂南大学 

摂南大学 FD 委員会が発足 10 年目を迎えました！

理工学部 熊谷樹一郎 (FD委員会委員長)

私が本学に着任した10数年前、私の周りでは教育改善に関する活動が数人の先生方を中心に、先駆的に推進されようとしていたことを記憶しています。当時、まだ教員経験の浅く、自身の学生時代の授業でも覚えのなかった私は、なぜ「教育」を大学で声高に語らなければならないのか、理解しきれないところもありました。

そうこうしているうちに月日は流れ、昨年度あたりからFD委員会のホームページ更新などに関わらせていただく機会を得ました。作業中、過去の情報を整理するなかで見つけた「摂南大学FD活動報告集 2002年度～2004年度」の冒頭には「本FD委員会は、2002年4月12日の『学部長会議』において承認を受け、本学におけるFD活動を積極的に推進する専門委員会として発足」とあります。今年がFD委員会が発足してちょうど10年目となるのです。

FD委員会発足後のこの10年、先生方のご努力や事務職員のみなさんのご協力には目を見張るものがあります。授業アンケート結果を一例として挙げれば、通常、総合評価というのは乱高下するケースが多いようですが、摂南大学の場合は実施時期に応じて徐々に高くなっている、という傾向があります。最近の上昇率にはやや陰りが見えますが、それにしても全体としての総合評価は高い値を維持しており、学生の視線を大切にす学風が醸成してきているとも解釈できます。

実は「10年目のFD委員会」といった意識はなかったのですが、今年の委員会活動ではさまざまな変化へのチャレンジが進められています。例えば、SG2のメンバーが中心となって、学生によるワークショップがはじめて開催されました。興味深いプロセス・結果が得られたようです。また、SG1では、理工学部で始まった「授業見学」を他学部で導入しようという動きも見られます。「授業公開」での見学者の少ない点に対応した方策の一つです。授業アンケートについては自由記述欄の教員内での共有化が始まっています。さらに、法学部・経営学部では、試行として記名式の授業アンケートの導入が図られようとしています。難しい問題を含んだ試みですが、その結果が活かされていくことになるでしょう。そして、このFDニュースのロゴも、SG3のメンバーである外国語学部・中西先生にご提案いただき、新しくなりました。ロゴの挿絵は「三人寄れば文殊の知恵」を表しているようでもあり、学生・教員・職員を表しているようでもあります。

さて、PDCAサイクルという言葉は使い古された感もありますが、「続けていくなら少しずつでも改善を」という姿勢を表したものともいえます。特にFD活動のように恒常的に継続していくものに対しては「少しずつ」が肝心ようです。今年のFD委員会で得られた成果が、何かしらの形で来年度以降の「少しずつ」に寄与できたらと考えています。

2011 年度前期「学生による授業アンケート」実施結果の報告

FD委員会 (SG1)

I 実施状況

2011 年度前期の「学生による授業アンケート」は6月27日(月)から7月9日(土)の2週間にわたって実施された。実施対象科目はこれまでと同様に、ゼミ・実験・演習および履修者数が10名以下の科目を除く全授業科目であった。回収は、学部・学科の判断に従い、教員ないし学生が担当した。また、アンケート結果の集計と分析法は過去との整合性を考慮し、これまでと同じである。

集計結果の報告と公開は、昨年度と同様に、①各授業担当者への結果報告、②各学部・学科への結果報告、③FDニュース等による学内での結果報告、④公開希望科目については摂南大学ホームページにて学内に限り期限付きで公開を行うこととした。また、学生が自由記述欄に寄せたコメントと教員による回答は、学部・学科ごとの“取り扱い方法”に従って整理され、教員各位にメールや文書によって配信されることになっている。

なお、以下に報告される集計結果について、<II アンケート結果の概要>では、学部・学科の開講する科目群でまとめられ、複数学部にもたがる授業科目のデータは除外されている。また、<III アンケート結果の分析>では、授業科目が特定されて教員が特定されることを配慮し、従来のカテゴリー区分の一部を変更した。

II アンケート結果の概要

9項目にわたる質問について、質問ごとに集計結果を示す。文中の相関係数はすべてピアソン式である。なお、学部・学科の日本語名とアルファベットは次のように対応する。

C 都市環境工学科	A 建築学科	E 電気電子工学科	M 機械工学科
B マネジメントシステム工学科	V 生命科学科	R 住環境デザイン学科	
L 外国語学部	I 経営学部	Y 薬学部	J 法学部 W 経済学部

(1) 質問1:「この授業にどの程度出席しましたか。」

アンケートに回答した学生のうち、100%出席(57.2%)と80~100%出席(32.2%)したと回答した学生の割合は89.4%であった。アンケート実施日が講義回数の12回~13回目に当たり、授業に欠かさず出席する学生と欠席しがちな学生がはっきりしてきた時期と思われる。また、本年度より出席に関する規定を設けた理工学部の各学科も微増している。なお、12学部・学科中7学部・学科で出席率が90%を超えた。

表2-1 出席状況

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
100%	1301	1306	1484	1989	334	768	265	2956	2982	4656	2235	1950	22226
80~100%未満	497	528	640	686	222	352	192	2489	2320	1510	1618	1441	12495
60~80%未満	86	119	88	154	40	33	53	809	597	434	535	383	3331
40~60%未満	6	15	13	15	3	1	6	101	105	99	92	43	499
40%未満	23	5	9	11	10	1	12	18	66	58	60	21	294
平均	4.59	4.58	4.6	4.62	4.42	4.63	4.31	4.3	4.33	4.57	4.29	4.37	4.44

(2) 質問2: 「この授業に意欲的に取り組みましたか。」

全学部・学科の平均値は3.88で、「4. そう思う」と「5. 強くそう思う」を加えた学生数の割合が高い。平均値が4.00を超えている学部・学科が2つあるが、概ね全体平均値の周りに分布している。各学部・学科ごとの平均値は昨年度とほぼ同様である。質問1で80%以上出席したと回答した学生が90%弱であったのに対し、質問2で「そう思う」(42.0%)および「強くそう思う」(27.0%)と回答した学生は69.0%に留まる。質問1と質問2の相関係数が0.385であることから、「出席しているから学生が授業に意欲的である」と言うことは難しい。

表2-2 取り組み状況

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強くそう思う	754	590	481	834	166	275	125	2016	1593	1827	1046	758	10465
そう思う	750	843	953	1159	291	485	196	2838	2645	2578	1979	1571	16288
どちらともいえない	314	463	635	720	115	330	156	1239	1363	1809	1163	1186	9493
あまりそう思わない	39	52	111	94	17	56	38	185	338	363	219	221	1733
全くそう思わない	45	21	52	41	14	7	12	79	108	166	126	88	759
平均	4.12	3.98	3.76	3.93	3.96	3.84	3.73	4.03	3.87	3.82	3.79	3.7	3.88

(3) 質問3: 「この授業の事前・事後学習課題をしましたか。」

この質問に関しては、全学部・学科の平均値が3.1と低い。学生は授業の事前・事後学習を時々しかしていないと考えられるが、昨年・一昨年より平均値は上昇している。質問2と質問3の間の相関係数は0.492で、ある程度の相関関係が見られる。各学部・学科でバラツキが大きいのは、学部・学科間の教科の特質を反映したものではないかと考えられる。

表2-3 事前・事後学習課題

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
大変よくした	455	406	271	407	87	123	73	1182	876	830	391	393	5494
よくした	634	495	554	581	177	255	107	1618	1345	1242	848	882	8738
時々した	538	728	907	954	208	411	184	2185	1954	2335	1630	1533	13567
あまりしなかった	154	227	307	497	82	235	93	816	1022	1222	800	629	6084
まったくしなかった	128	111	193	405	53	129	71	556	855	1114	850	393	4858
平均	3.59	3.44	3.18	3.03	3.27	3.01	3.03	3.32	3.06	2.92	2.81	3.07	3.1

(4) 質問4: 「この授業の到達目標を達成できましたか。」

全学部・学科の平均値(3.53)は、昨年と一昨年より高い。授業の最初に到達目標が説明されるようになったことが一因と考えられる。「どちらともいえない」と回答している割合が40.9%もあり、単に学生に到達目標を説明するだけでなく、理解させるような授業の工夫が求められよう。学部・学科間の差異も大きくなく、文科系と理工系においても違いはないと思われる。

表2-4 到達目標

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強くそう思う	451	365	256	499	120	113	66	1391	1079	1080	592	421	6433
そう思う	689	623	697	919	232	348	159	2353	1997	1935	1517	1174	12643
どちらともいえない	596	829	1021	1157	219	550	243	2202	2314	2962	1937	1783	15813
あまりそう思わない	90	107	182	176	23	108	36	307	488	512	274	339	2642
全くそう思わない	78	38	75	97	14	33	21	108	165	248	185	112	1174
平均	3.71	3.6	3.39	3.54	3.69	3.35	3.41	3.73	3.55	3.46	3.46	3.38	3.53

(5) 質問5:「この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか。」

全学部・学科の平均値は3.79で、各学部・学科の平均値は全体の平均値の周辺にばらついている。「そう思う」、「どちらともいえない」と回答した学生の割合は38.6%と33.3%であり、シラバスの内容どおりに授業が進んだかどうか判断がつかない学生が多いと思われる。シラバスはあくまで授業計画であり、学生の受講態度や授業の特質に合わせて柔軟に用いられなければ、学生の実態に応じた授業とならない。しかし、「どちらともいえない」と回答する学生の割合を少なくすることは必要だと思われる。

表2-5 シラバスの内容

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強くそう思う	579	472	398	657	149	200	92	2001	1415	1571	987	602	9123
そう思う	702	655	918	986	258	467	178	2597	2400	2422	1746	1630	14959
どちらともいえない	497	778	795	1055	178	445	222	1581	1973	2460	1530	1389	12903
あまりそう思わない	48	37	75	88	10	33	20	117	189	183	143	137	1080
全くそう思わない	80	26	45	66	13	10	16	65	84	101	119	73	698
平均	3.87	3.77	3.69	3.73	3.86	3.7	3.59	4	3.8	3.77	3.74	3.67	3.79

(6) 質問6:「この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか。」

全学部・学科の平均値は3.88で昨年度前期と一昨年からはほとんど変化していない。具体的には「4. そう思う」および「5. 強くそう思う」を選択した学生39.4%と29.5%で比較的高い。「4. そう思う」および「5. 強くそう思う」を選択した学生の合計の割合は68.9%であり、多くの学生は教員が熱意をもって授業に臨んでいたと評価している。なお、各学部・学科の平均値に少し差があるのは、教員数・授業の規模・授業の性格などが影響していると考えられる。

表2-6 教員の熱意

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強くそう思う	575	532	501	700	178	280	98	2639	1807	1979	1317	857	11463
そう思う	727	730	886	1032	245	523	194	2489	2539	2589	1751	1583	15288
どちらともいえない	423	553	653	845	154	277	164	979	1288	1686	1105	1068	9195
あまりそう思わない	67	99	121	166	19	51	45	166	296	308	182	201	1721
全くそう思わない	115	56	72	108	12	24	25	95	129	186	182	125	1129
平均	3.83	3.8	3.73	3.72	3.92	3.85	3.56	4.16	3.92	3.87	3.85	3.74	3.88

(7) 質問7:「この授業の担当教員は、授業内容を理解させるための工夫をしていましたか。」

全学部・学科の平均値 (3.77) は、昨年の結果と変化がない。この質問について学部・学科の平均値が4.00を上回っている学部は1つである。質問6と質問7の間の相関係数は0.809で、強い相関関係が見て取れる。学生に熱意を感じさせることや授業内容を理解させるために工夫をしたことが反映されているのであろう。

表2-7 理解させる工夫

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強く思う	562	513	442	607	187	247	77	2477	1611	1822	1119	702	10366
そう思う	682	672	873	976	220	498	189	2405	2363	2378	1806	1483	14545
どちらともいえない	428	577	660	934	162	293	178	1125	1481	1793	1133	1191	9955
あまりそう思わない	100	114	145	191	24	80	51	225	422	468	234	298	2352
全くそう思わない	136	94	115	144	15	37	32	134	184	292	245	163	1591
平均	3.75	3.71	3.62	3.6	3.89	3.73	3.43	4.08	3.79	3.74	3.73	3.59	3.77

(8) 質問8:「この授業の担当教員の話し方は、明瞭でわかりやすかったですか。」

全学部・学科の平均値は3.69で、昨年の平均と同じである。各学部・学科の平均値で4.00を超えているのは1学部であった。質問7と質問8の間の相関係数は0.844で、強い相関関係が見て取れる。教員の話し方の明瞭さは授業内容を理解させるための工夫の表れであると受け止められたのであろう。

表2-8 教員の話し方

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強く思う	535	490	431	569	168	242	79	2408	1598	1744	1189	690	10143
そう思う	670	660	789	912	231	468	153	2352	2247	2265	1644	1377	13768
どちらともいえない	447	557	705	949	170	286	183	1171	1473	1774	1123	1191	10029
あまりそう思わない	91	149	176	247	23	107	66	263	483	573	296	371	2845
全くそう思わない	164	115	133	174	16	51	47	172	259	393	280	204	2008
平均	3.69	3.64	3.54	3.51	3.84	3.64	3.29	4.03	3.73	3.65	3.7	3.52	3.69

(9) 質問9:「総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか。」

全学部・学科の平均値は3.77であり、各学部・学科の平均値で4.00を超えている学部は1つであった。他の学部・学科の平均値に大きなばらつきはない。質問9と質問8の間の相関係数は0.808で、強い相関関係が見て取れる。同じく質問9と質問7、質問6の間の相関係数は、0.791と0.735で、ある程度強い相関関係が見て取れる。さらに質問9と質問5、質問4、質問2の間の相関係数は0.629、0.608、0.573で、ある程度の相関が見て取れる。

表2-9 総合満足度

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	計
強くそう思う	567	524	471	664	168	274	96	2525	1704	1858	1253	750	10854
そう思う	652	662	767	957	220	420	165	2286	2198	2253	1629	1377	13586
どちらともいえない	474	613	747	919	186	358	197	1193	1558	1788	1175	1232	10440
あまりそう思わない	76	92	142	160	13	72	44	210	369	441	219	285	2123
全くそう思わない	135	77	101	150	20	30	25	153	223	292	245	184	1635
平均	3.76	3.74	3.61	3.64	3.83	3.72	3.5	4.07	3.79	3.75	3.76	3.58	3.77

質問6から8までの回答結果はほぼ一致した傾向を示している。これは総合満足度を高めるための因子を検討するために重要なデータであろう。授業で総合満足度を高めるには、発言や対話、討論など学生が参加できる授業形態をとる少人数教育が有効と考えられる。

2002年度以来の「総合満足度」の経年変化をみると(図2-1)、前期・後期とも上昇傾向となっている。さらに、前期・後期の総合満足度は一定の水準(およそ3.8)で安定している。FD活動が授業内容の改善に効果をもたらしてきたことは明らかである。

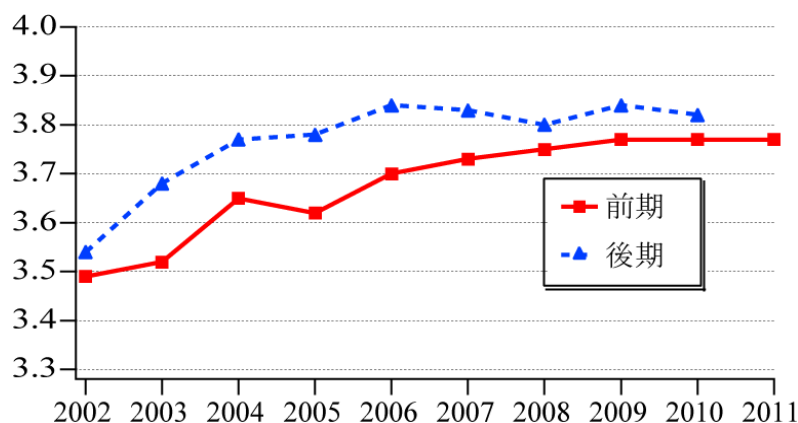


図2-1 総合満足度の経年変化

III アンケート結果の分析

学生の授業「満足度」(質問9)がどのような要因によってもたらされたのか検討する。質問項目にはない授業の客観的な条件、すなわち、履修者数による授業規模、科目担当教員の年齢(4月1日時点での満年齢)、担当教員の職階、授業時限、必修・選択の別、科目の分野別の各観点から、授業「満足度」の集計結果(平均値)に違いがあるかをみる。また、ピアソンの相関係数をもとに質問項目間の関連性について、特に授業「満足度」(質問9)に関連づけて考察する。

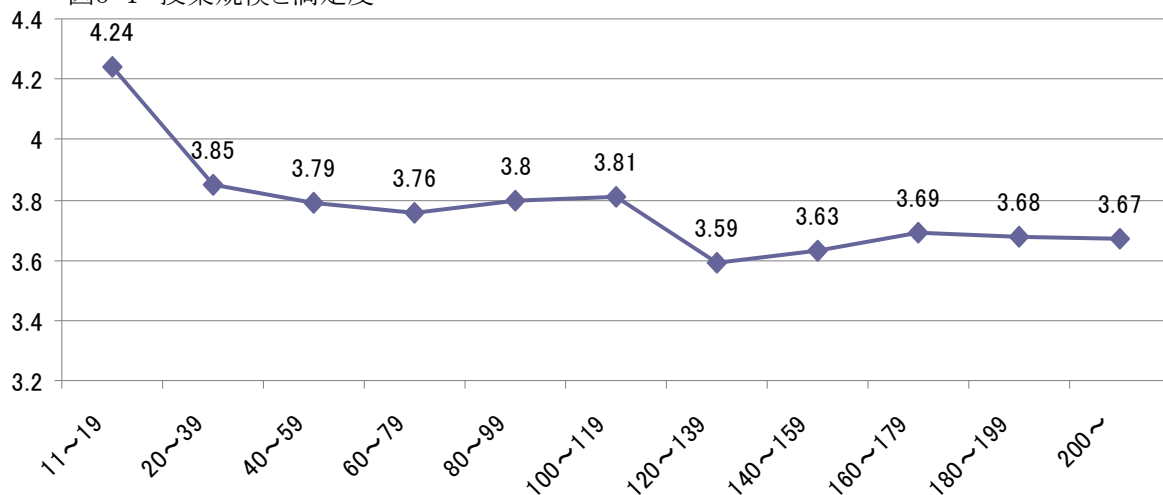
(1) 授業規模と満足度

ここでは学部・学科別には結果を表示せず、全体の結果のみを表示する。理由は次の点にある。
 ①学部・学科間で規模別の科目数に差異がある。②科目の特定化を抑制することができる。③満足度に影響する要因として学部・学科による差を捨象することができ、授業規模に焦点化させられる。

満足度は、履修者数が19人以下か20人以上かで一つ差があり、119人以下か120人以上かにもう一つの差を見てとれる。19人以下の科目では満足度の全体平均を約0.5ポイント上回り最大、20

人以上119人以下の科目では全体平均と同等かそれ以上、120人以上の科目では全体平均を下回るという結果であった。概して小規模の科目で満足度が高い結果だが、履修者数の各階級に属する科目数には開きがあり、平均値の単純な比較には注意を要する。

図3-1 授業規模と満足度

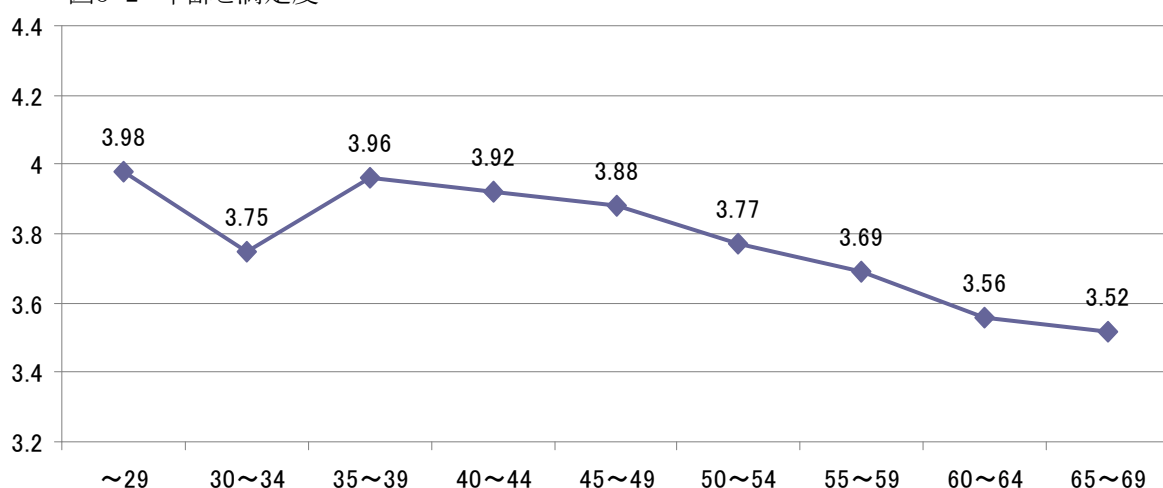


(2) 教員年齢と満足度

ここでも前項(1)と同様の理由により、学部・学科別には結果を表示せず全体の結果のみを表示する。

30歳以上34歳以下の教員が担当する科目で満足度の落ち込みが見られるが、数値自体は平均値とほぼ同等で決して低いものではない。全般的には、若い教員の科目の方が満足度が高い傾向を指摘できる。なお、単なる年齢が満足度に影響を与えるわけではなく、他の要因（例えば「体力」など）を介して満足度に作用するものであり、その意味では特に次項(3)にみる教員の職階と併せて検討される必要があるだろう。なぜなら、職階は年齢と相関しており、職階により教員が担う諸役割の比重が授業の質に影響していると考えられるからである。

図3-2 年齢と満足度



(3) 職階と満足度

ここでは助教を「専任講師」に含めて集計している。

全体の結果をみると、職階による差があるとは言えない。教授が担当する科目で若干、満足度が

低くなるのは、この職階には年齢の高い教員が相対的に多く属し、授業と直接的には関係しない管理的な役割を学内・学部内で果たすようになってくるからであろうか。なお、専任教員の科目の満足度の値が非常勤講師の科目のそれを上回るのは、昨年度にはみられなかった傾向である。

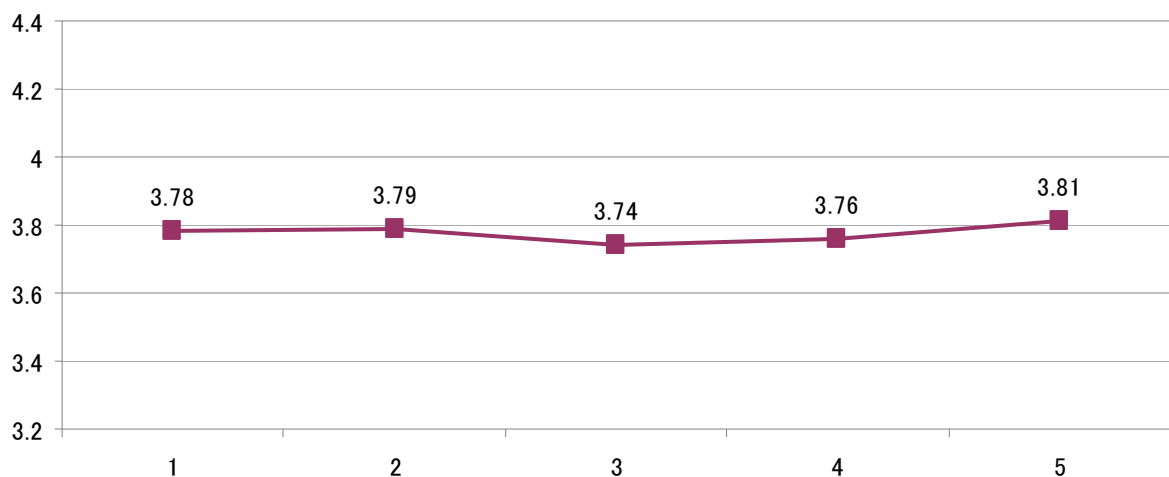
表 3-1 職階と満足度

区分	職階	満足度 (平均)
専任	講師	3.84
	准教授	3.86
	教授	3.71
	計	3.78
非常勤	講師	3.76
全体		3.77

(4) 授業時限と満足度

授業時限による満足度の差はみられない。昨年度前期の授業アンケートでは満足度の高い順に、1限>2限>4限>5限>3限という結果であったが、今年度は集中講義を除いて同じく満足度の高い順に並べると、5限>2限>1限>4限>3限という結果となり、3限の科目の満足度が最も低いというほかは一貫した傾向は認められず、授業時限によって満足度に差が現れるとは言えない。

図3-3 授業時限と満足度



(5) 必修・選択の別と満足度

必修・選択の別による科目の満足度に差があるとは言えない。例年、選択科目の方が必修科目より満足度が高い傾向にあるが、学生が何を基準に科目を選択しているのか、興味深いところである。今回の結果では昨年度に比べ、必修科目・選択科目の満足度の差が縮小した。

表 3-2 必修・選択の別と満足度

必修・選択の別	満足度 (平均)
必修	3.66
選択	3.8
全体	3.77

(6) 科目の分野別と満足度

学部・学科によって置かれていない科目の分野があり、また分野によって科目が特定されてしまうことを防ぐため、分野の区分では、専門分野で専門科目と専門関連科目の2つを区別し、その他の分野で基礎科目、教養科目、キャリア科目、教職科目の4つを区別した。なお、キャリア科目、教職科目の数値は科目が特定されてしまうことを防ぐために割愛し、全体の結果のみを表示した。

基礎科目の満足度が低くなっているほかは、分野による科目の満足度に大きな差はないと言える。表示の4分野を満足度の高い順に並べると、専門>教養>専門関連>基礎の順になり、この4分野について言えば、昨年度前期の授業アンケート結果と同じ傾向である。しかし、昨年度後期の授業アンケート結果からこの4分野を満足度の高い順に並べると、専門>教養>基礎>専門関連の順になり、専門関連科目と基礎科目の順位が逆転している。加えて、いずれの期の結果においても、第3位と第4位の分野の間に満足度の差が見てとれるのである。

表3-3 必修・選択の別と満足度

分野	満足度 (平均)
専門	3.79
専門関連	3.72
基礎	3.55
教養	3.75
キャリア	-
教職	-
全体	3.77

(7) 質問項目間の相関

各質問項目間の関連性を明らかにするためにピアソンの相関係数を算出した。質問項目の組み合わせの多くの対に相関が認められるなかで、特筆すべきは以下の5点である。

第一に、「出席率」(質問1)は授業への意欲的「取り組み」(質問2)と「到達目標」の達成(質問4)の2項目に弱い相関があるのみである(相関係数については表3-4を参照)。言い換えれば、「出席率」は他の多くの項目から独立した項目であるように見える。なぜそのように見えるのか。端的には、「出席率」が高い学生が授業に出席し、アンケートに回答しているからだろう。つまり、前節にみたように「出席率」に関する質問には大半の学生が「100%」出席したと回答し、平均値も4.44と高く、かつ標準偏差の値が0.765で学生間におけるバラつきも非常に小さいことからわかるように、出席を当然のことと考えている学生が授業の評価とは関係なく授業に出席しアンケートに回答したと思われる。仮に、出席が常でない学生がアンケートに回答していたら、他の質問項目との相関係数は大きく異なっていたかもしれない。学生の授業に対する姿勢は、授業への意欲的「取り組み」(質問2)や「到達目標」の達成(質問4)などと合わせて検討することが必要であり、単なる出席率だけで問うことは出来ないであろう。

第二に、授業への意欲的「取り組み」(質問2)は「出席率」(質問1)を除くすべての項目との間でやや強い相関が認められ、「到達目標」の達成(質問4)も「出席率」(質問1)を除くすべての項目との間でやや強い～強い相関が認められた。

第三に、「授業の事前・事後学習課題」の遂行(質問3)は「出席率」(質問1)を除くすべての項目との間で相関が認められたが、なかでも意欲的「取り組み」(質問2)および「到達目標」の達成(質問4)との間でやや強い相関が認められた。適切な学習課題自体が小刻みな学習目標となり、学生は授業本時に学ぶだけでなく課題を事前・事後に着実に遂行することで、到達目標の達成感を醸成するのである。

上記項目はいずれも学生の自己評価項目である。その回答結果の信頼性、妥当性については別途検証されるべきであろうが、これらの自己評価が授業「満足度」と相関があることには注目すべきだろう。つまり、授業に対する満足は、授業をなす教員や授業の客観的条件によってのみもたらされるのではない。学生自身による主体的姿勢、主観的認知によって授業の「満足度」は変化しうるのである。

第四に、授業「満足度」と相関が認められたのは「出席率」（質問1）を除くすべての項目であったが、なかでも「到達目標」の達成（質問4）、「シラバス」に沿った授業（質問5）、教員の「授業に対する熱意」（質問6）、「授業内容を理解させるための工夫」（質問7）との間で強い相関が、また明瞭な「話し方」（質問8）との間でかなり強い相関（相関係数0.81）が認められた。

第五に、しかしながら、上記第四に挙げた項目ごとにみると、それぞれにおいて、授業「満足度」（質問9）以外の項目との間により強い相関が見られる。すなわち、「到達目標」の達成（質問4）においては「シラバス」に沿った授業（質問5）との間、また「シラバス」に沿った授業（質問5）においては教員の「授業に対する熱意」（質問6）や「授業内容を理解させるための工夫」（質問7）との間、教員の「授業に対する熱意」（質問6）に関しては「授業内容を理解させるための工夫」（質問7）および明瞭な「話し方」（質問8）との間、また「授業内容を理解させるための工夫」（質問7）については、他に明瞭な「話し方」（質問8）との間に強い相関が見られる。

このことは、上記の各項目がそれぞれ単独で学生の授業「満足度」に影響を及ぼす要因として作用しているのではなく、項目間で相互に影響を及ぼし合いながら、複合的な要因として授業「満足度」を規定していることをうかがわせる。したがって、学生の授業に対する「満足度」を高めようとするならば、例えば内容理解のための教材を工夫するとか、話し方のトレーニングをするなど、各要因に個別に焦点づけてスキルアップを図る努力もさることながら、要因間の影響関係を読み解くことが授業改善への道標となる可能性が高いといえるだろう。そこには、アンケートでは尋ねられていない要因も介在しているはずだ。これらについてどれだけ思いを巡らせるかが、授業改善への第一歩となるだろう。

表 3-4 質問項目間の相関（ピアソンの相関係数：相関が認められるもののみ記載）

	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8	質問9
質問1	1	0.38		0.22					
質問2		1	0.49	0.59	0.50	0.51	0.51	0.50	0.57
質問3			1	0.55	0.39	0.34	0.36	0.36	0.38
質問4				1	0.65	0.57	0.58	0.58	0.61
質問5					1	0.68	0.65	0.63	0.63
質問6						1	0.81	0.76	0.73
質問7							1	0.84	0.79
質問8								1	0.81
質問9									1

<図表中、相関係数0.2以上0.4未満に「弱い相関」、0.4以上0.6未満に「やや強い相関」、0.6以上0.8未満に「強い相関」、0.8以上に「かなり強い相関」という表現を便宜的に当てている。>

IV まとめ

今回実施された「学生による授業アンケート」の集計結果と分析によって明らかにされた特徴をまとめ、最後に今後の課題を付記する。

- (1) 最も高い評価を得た項目は、学生の出席率 (4.44) であり、生命科学科の出席率 (4.63) が最も高く、低い学科においても4以上であった。アンケート回答者の出席率は全体的に高いことが分かる。しかし、前節 (Ⅲ) で述べたように、出席率が他の項目と比べて授業の満足度に反映されていないことは注目すべきことと考える。
- (2) 最も低い評価項目は、授業の事前・事後の学習 (3.10) であり、都市環境工学科の評価 (3.59) が最も高く、評価が3を下回った学科も存在する。
- (3) 授業に対する満足度 (3.77) は、昨年度後期の評価 (3.82) より少し低下している。
- (4) 授業規模と満足度との関係は、昨年度と同様に少人数において満足度が高く、120人を超える授業の満足度は低くなる傾向があった。しかし、多人数でも高い評価を得ている授業もあり、講義内容や講義方法の工夫などによって満足度が改善される余地があると思われる。
- (5) 教員年齢や職階と授業満足度との関係では、若い教員や准教授の評価が高いなど、ほぼ昨年度と同じような傾向が認められた。話しのわかる先生や親しみのもてる“若い”先生の授業が高く評価されていたのだろうか。
- (6) 授業時限による授業に対する満足度の違いはあまり見られない。昨年度に比べて5時限目の授業の満足度が幾分高かったが(3.81)、受講者数や教員の年齢等などによる効果と思われる。
- (7) 必修・選択など履修区分による授業の満足度との関係では、昨年度と同様に必修科目の評価 (3.66) より選択科目が高い評価 (3.80) を受けている。しかし、逆転している学部や学科もあり、その背景要因を明らかにすることは今後の課題である。

今回の「学生による授業アンケート」の結果は、ほぼ昨年度と同様の傾向を示しており、学生の授業に対する満足度は先生の授業に対する熱意 (質問6)、授業内容を理解させる先生の工夫 (質問7)、先生の話し方の明瞭さ (質問8) と強い関係にあることを示している。

しかし、前節 (Ⅲ) で指摘したように、授業に対する学生の満足度は決して教員の熱意や工夫だけで得られるものではない。真の満足度は学生自身がどれだけ積極的に授業と向き合ったかにある。授業目標を理解し、達成したという自己評価 (3.53) や授業理解のための事前・事後学習をしたという自己評価 (3.10) が授業の満足度に反映されることが最も望ましい。

受講生は教員の授業に対する努力に関心に向け高い評価を与えている。また、授業に積極的に取り組んだと高く自己評価 (3.88) している。しかし、それらの自己評価と授業の満足度との相関関係は教員の努力などとの相関関係より弱い。教員の努力は、話し方や板書、あるいはプリントやスライドの工夫など、目に見えるところで評価を受けやすいが、真の授業改善は学生が主体的に授業に関わる場所にある。その意味で、これからの「授業アンケート」は学生自身が自らの学習態度や学習方法の改善を図るための「授業アンケート」であることが望ましいと思う。

2010年度 全学FDフォーラムの報告

外国語学部 北條ゆかり (FD委員会SG2リーダー)

2010年度の全学FDフォーラムは、2011年3月16日(水)13時～16時、寝屋川学舎5号館5階552教室で開催された。

摂南大学で「FD活動」なるものが開始されたのは2002年。まもなく10年目を迎えようとしている。それに対して全学FDフォーラムは1995年より数えて16回目となった。教職員が一堂に会し、教育をめぐるひとつのテーマのもとで情報や認識を共有できる貴重な機会である。FDフォーラムでの近年の検討課題は、基礎教育をいかに充実させるか、とりわけ、各学部が実施している基礎教育と全学レベルで行おうとしている基礎教育との間でどのように連携を図るべきかということにあった。その一環として、2008年度のテーマは「摂南大学の初年次教育の整備にむけて」、2009年度は「摂南大学の教養教育—全学共通化をめぐる—」が選定された。これを踏まえ、かつ、学生が直面している「超」就職難の現状に鑑み、教育改革の内発的な取組みの中で重要な柱として位置づけられる「キャリア教育—教養教育・専門教育との一体化をめざして—」を2010年度FDフォーラムのテーマとした。

今回は外部講師を招き、テーマに関する先行例から学ぶという例年の形をとらず、プログラム第I部では、横倉就職部長より「摂南生の就職活動の実態」、太田教務部長より「キャリア教育をめぐる内外の状況」についてご説明いただき、小山法学部長より2011年度からキャリア・フライデーを他学部在先駆けて導入する法学部の方針をご紹介賜った。現状認識に立ち、「教育の職業的意義」というものの内実をどのように構築するかを考える機会とし、キャリア教育推進をめぐる方向性の合意を目指そうとしたものであった。第II部では、各学部から現行のキャリア教育と就職支援体制の紹介がなされた。成果として、一定の専門的輪郭を備えていると同時に、柔軟な発展可能性や適用可能性に拓かれているような教育、状況把握・情報分析・論理的思考・創作的提案といった、いわゆる概念能力を涵養する使命とその仕組みづくりが、学部横断的に全学規模で構築される必要性が確認されたのではないだろうか。

時間配分の拙さから、期待していた意見交換の時間をとれなかったが、アンケートへの回答(43名)を通じて、この機会に当日の報告内容を改めて想起すると同時に多様な受け止め方を知っていただくためにご紹介したい。

1. テーマ設定について(「重要でタイムリーであった」を選んだ方が100%)
2. 「キャリア・フライデー」の取組み内容について(「よく理解できた」は65%)：「単なるマナー講座にならないためのシラバスは?」「全学的な就職連携の取組みは理解できる。推進してほしい。ただ、キャリア科目を受けた学生のフォローを具体的にどうするのかわからなかった」「理工学部のような科目構成の場合、現実的なのか?5コマ×6セメ(3年時終了)=30コマ/200コマor150コマは大きすぎる比率」「キャリア形成科目と教養科目の関係が不明」「授業科目として学部専門科目と全学共通のどちらに位置づけられるのか、まだ内容が不明確と思えた」「キャリア教育・キャリア・フライデーとも、具体的なことがどうしても分からない。就職意欲のない学生にどうやる気を起こさせるのか」「段階的に全学部において(全学的に)展開する計画であるのなら、全学の教職員がその趣旨と全容を了解していなければ、学生にとってはもっとわかりやすく、効果も期待できないのではないか。現時点ではこの新事業の効果に疑問を持つ声や認知度の低さが目立つようである」
3. 各学部の取組みについて(「大変参考になった/参考になった」が44%、無回答51%)：「各学部の取組みについてわかりやすく具体的に話をいただき、他学部のキャリア教育について理解が深まった」「引用文献や実施内容が各部で異なるのでいろいろな視点がわかった」「学部学科によって目指す職業・分野がちがうので、すぐに自分の学科に取り入れられるのかは不明」「薬学部

の取組みは体系的。他のどの学部もキャリア教育には意欲的に取り組んでおり、こうした実績をキャリア・フライデーにどう活かすのかが今後の課題となろう」「インターンシップについては再検討を要する」「学部ごとに専門分野に占めるキャリア教育の意義内容が異なるため、方法論としては全体的に曖昧で拡散しているかの印象を受けたが、各報告からは、専門教育をキャリア教育に結びつける必要性が確実に教育現場で認識されてきており、個々に模索と努力が進行していると感じられた」

4. 感想：「正社員になるべくキャリア意識を高めるのはいいが、そもそも正社員とそれ以外の格差をつける社会のあり方にも、大学としてアンチテーゼを示すべきではないか」「学内・他学部の様子が分かり参考になり、まず身内を知ることの大切さを今さら思い知らされた」「学生を支援することは重要だが、手厚すぎるサポートは学生に「大学がどうにかしてくれる」という意識を持たせる可能性がある。初年次にテストや留年などで厳しさを示し、危機感や自らが行動しないとダメだという意識を持たせることも必要」「全学的な就業力向上委員会、就業力支援センターと各学部の教務委員会・就職委員会との関係性が不明」「各学部の試みにどのような効果があったのかアセスメントを聞きたい」「現カリキュラムでは重複している内容が多いので、整理統合が必要」

第3回教職員研修ワークショップの報告

理工学部 熊谷樹一郎（プロジェクトチーフ）

2011年8月23日（火）～8月24日（水）に第3回教職員研修ワークショップが開催された。教職員ワークショップは薬学部の先生方にタスクフォース（ファシリテータ）の中心となって実施していただいた関係もあり、第2回までは枚方キャンパスでの開催だったが、本年度ははじめて寝屋川キャンパス（10号館）において実施することになった。また、今年の教職員研修ワークショップは学長方針に基づいて「研修」といった扱いであり、教員自らの授業改善活動を組織的に行うFD活動とは趣を異にするもの、とのことで、FD委員会の活動から離れ、別にプロジェクトチームが編成され、開催されるに至っている。

今回の参加者は合計59名であり、教員が41名、職員が18名といった構成であった。昨年度から比較すると職員の参加の割合が多くなっており、教職協働の形が具現化されたような構成となった。教職員ともに在籍1年目の方が多く参加されたことも特徴の一つであり、さまざまな場面で新鮮な空気が持ち込まれたような印象を受けた。

ワークショップでは全体を大きく2つ（P1およびP2）に分け、その1つのなかを3つの少人数グループ（SG）が構成するようにした。それぞれのSGでは「摂南大学の入試制度の問題点」や「カリキュラムプランニング」といったテーマの下で、掲載した写真のように討議し、3グループ合同での発表・質疑が行われた。得られた成果（プロダクト）や参加者の方々の感想については後日発行される報告書に譲るが、普段あまり話す機会のない教員・職員が一つのテーマについて意見を交換し、ともにまとめ上げていく姿は、単なる知り合いづくりという枠組みをはるかに超えていたような印象であった。掲載した写真から読み取れるものでもないが、相互理解や価値観の共有などが時間とともに深まっていくようであった。特に二日目については、参加者の方々自らが役割を認識し、それぞれが役割ごとに議論や作業を進めていくスタイルが自然と確立されており、タスクフォースの一人としてお手伝いしていた私自身にはほとんど手出し・口出しする余地がなくなっていた次第である。

「教職員研修ワークショップへの参加」と聞くと「しんどい」「疲れる」というコメントを耳にすることがある。その一方で「楽しかった」という言葉を聞くこともある。普段やり慣れないことをすれば「しんどい」ことになるし、そこで人や考え方についての新たな出逢いがあれば「楽しかった

た」という感想も出てくるのであろう。ある意味で両方ともに事実と言えるのではないか。

教職員研修ワークショップは、来年度以降も引き続き開催される予定である。現在、チーフタスクフォースの薬学部・河野先生、ディレクターの太田教務部長を中心としてタスクフォース経験者が今後の進め方を議論しているところである。次の機会に恵まれた方は恐れずに、楽しみながら参加いただけたらと思う。



少人数グループでの討議 (P1)



少人数グループでの討議 (P2)



全体での発表の様子 (P1)



全体での発表の様子 (P2)



集合写真 (P1)



集合写真 (P2)



修了証授与の様子

「学生参加型FD 活動の試みー学生によるワークショップー」実施報告（概要）

FD委員会（SG2）

2011年8月24日（水）13:00～16:30、摂南大学 寝屋川キャンパス（10号館）において、「学生参加型FD 活動の試みー学生によるワークショップー」が開催された。これまで教職員によるWS（ワークショップ）は実施されてきたが、学生が参加するWSの開催ははじめてのことである。

写真1：グループでの議論の様子



学生26名（全学部の2、4年生）、教員11名が参加し、学生が「4年間あるいは2年間の大学生活を通して印象に残っていること」をテーマとして議論を行った。学生は4つのグループに分かれ、各々KJ法にしたがって議論を進め、各グループで議論した内容を全体で発表、合同討論を行った。

初の試みであるにもかかわらず、議論は盛り上がり、参加した学生からは、「普段聞くことのできない他学部や他学年の学生意見を聞いた」「とても貴重な体験であると同時に、他学部学生

との交流も出来たので、とても楽しかったです。文系と理系の授業の内容の違いにびっくりしました」「摂南大学がこれからもっともっと良くなるように意見がたくさん出てきて、良かったと思う」などの声が聞かれた。

但し、「1つ1つの時間が本当に足りませんでした」「時間が少なかったというのが大きいと思います。何日かかけた方が解決策等が多く出たように思います」など、議論が盛り上がった分、時間が足りないと感じた学生もいた。なお、この内容の詳細については、年度末開催のFDフォーラムで報告される予定である。

写真2：全体発表・討論の様子



写真3：終了後の記念撮影



2011年度 外国語学部FD活動報告

外国語学部 中西正樹

外国語学部では、2011年7月12日(火)16:40~18:10に第6会議室で第11回FDフォーラムを開催した。テーマは「初年次ゼミナールの果たす役割 — テキスト『First Year Study Guide2011』の内容検討を通して —」。参加者数は29名であった。

今回『First Year Study Guide2011』をテーマとして取り上げたのは、外国語学部1年次前期の「初年次ゼミナール」にこの冊子が教科書として使用されており、その内容や使い勝手が向上することはFD活動につながると考えたからである。今回のフォーラムではその内容を再検討し、学生、教師にとってより使いやすく、初年次教育にふさわしい教科書とは何かを考えることにした。

フォーラムは自由討論の形式で行われたが、冒頭で3名の教員より、冊子の使い方、内容に対する印象、改善点などについて報告があった。報告の要旨は下の通り。

1. レポート作成や資料収集に関わる章では、盗用や剽窃についての説明はもっと充実させてほしいし、正しい引用例と誤った引用例が対比してあればなおよい。また、安易なコピペも目立つことから、ネット上に掲載されている情報の扱いについても充実した説明を期待したい。
2. 最近の学生には、一語だけの発話が目立つ。幼児期や家族間ならともかく、公的な場での一語発話はコミュニケーションに問題が生じることを理解せねばならない。そこで、授業の中で身の回りのことや新聞上のトピックなどを題材に話をさせる実践をしている。教科書にも、論理的な構成をもつ文章を作るためのプログラムを望みたい。
3. 学生は、教師が想像する以上に「聞かれ」たがっている。教師や教科書は問題を提起し、学生から答えを引き出そうという姿勢が望ましいと考える。例えば「薬物」がなぜ禁止されるのか。まずはこういった問いを投げかけてはどうだろう。関連する情報も彼ら自身に調査させたいところである。自ら考え、ゼミ生の間で意見を交換してこそ深い理解に到達できるのではないかと。

上の報告のあと、全員で討論を行った。報告の内容に関わるものでは、教科書に「引用」というテーマの独立した単元を作るべきとか、教科書に書き込めるスペースを設けてはどうかといった意見、敬語の使い方も含めた口頭コミュニケーションやメールの書き方について具体例を挙げた内容を盛り込むべきなどの提案があった。新任の教員からは前任校の初年次教育について紹介があった。

このほかにも、具体的な提案が多数出された。主なものを下に挙げる。

1. 授業のために各教員が用意した資料を共有できるシステムを構築することが必要。
2. 高校での学びと大学での学びの違いを理解させるための内容が必要。
3. パワーポイントを使う授業の受け方について。
4. 「履修申請」に、「履修登録の確認をすること」を明記してほしい。

『First Year Study Guide2011』はFD活動に関わるとはいえ、その編集は教務委員会が扱うこととなっているので、このフォーラムに参加した教務委員に対して、ここで得られたアイデアを次年度版の編集に生かすよう要望した。

編集後記

FD ニュース第32号をお届けする。今号より表紙デザインを変更し、また新規に実施された学生参加ワークショップの報告も掲載した。FD 活動自体もそうだが、FD ニュースもマンネリにならないよう、アイデアを出し、工夫を重ねる必要があるだろう。今後とも心して取り組みたい。